

八島

世阿弥作

季は	地は	ワキ	後	シテ	ツレ	シテ	前
春	讃岐	源義経	前に同じ		漁夫	漁翁	都の僧

「月も南の海原や。く。八島の浦を尋ねん。

詞
「是は都方より出でたる僧にて候。我いまだ四国を見ず候ふほどに。此度思ひたち西国行脚とこゝろざし候。

道行
「春霞。浮き立つ浪の沖つ舟。く。入日の雲も影そひて。其方の空と行くほどに。はるぐなりし舟路へて。八島の浦に着きにけり。く。

詞
「急ぎ候ふほどに。是は早讃岐の国八島の浦に着き

て候。日の暮れて候へば。是なる塩屋に立ち寄り。

一夜を明かさばやと思ひ候。

「おもしろや月海上に浮んでは波濤夜火に似たり。

ツレ
「漁翁夜西岸にそうて宿す。

二入
「あかつき湘水を汲んで楚竹を焚くも。今に知られ

て蘆火の陰。ほの見えそむる物すごさよ。

ツレ
「月の出汐の沖つ波。

「霞の小舟漕がれ来て。

シテ
「海士の呼声。」

二入
「里ちかし。」

シテサシ
「一葉万里の舟の道。唯一帆の風に任す。」

ツレ
「ゆふべの空の雲の浪。」

二人
「月のゆくへに立ち消えて。霞にうかぶ松原の。影
は緑にうつろひて。海岸そことも知らぬ火の。筑
紫の海にやつゞくらん。」

下歌
「こゝは八島の浦づたひ。海士の家居もかずくに。」

上歌
「釣のいとまも波のうへ。く。かすみわたりて沖
ゆくや。海士の小船のほのぐと。見えて残る夕
ぐれ。浦風までものどかなる。春や心をさそふら
ん。く。」

シテ詞
「まづく 塩屋に帰り休まうずるにて候。」

ワキ詞

「塩屋の主のかへりて候。立ちこえ宿を借らばやと
思ひ候。いかに是なる塩屋の内へ案内申し候。」

ツレ詞
「誰にて渡り候ふぞ。」

「諸国一見の僧にて候。一夜の宿を御かし候へ。

ツレ 「暫く御待ち候へ。主に其由申し候ふべし。いかに

申し候。諸国一見の御僧の。一夜の御宿とおほせ候。

シテ詞 「やすきほどの御事なれども。あまりに見ぐるしく

候ふほどに。御宿は叶ふまじき由申し候へ。

ツレ 「御宿の事を申して候へば。あまりに見ぐるしく候

ふほどに。叶ふまじき由おほせ候。

ワキ 「いや／＼見ぐるしきは苦しからず候。殊に是は都

方の者にて。此浦はじめて一見の事にて候ふが。

日の暮れて候へば。ひらに一夜とかさねて御申し候
ヘ。

ツレ 「心得申し候。唯今の由申して候へば。旅人は都の
人にて御入り候ふが。日のくれて候へば。平に一
夜と重ねて仰せ候。

シテ 「何旅人は都の人と申すか。

ツレ 「さん候。

シテ「げに痛はしき御事かな。さらば御宿を貸し申さん。

ツレ「もとより住みかも蘆の屋の。

シテ「たゞ草枕とおぼしめせ。

ツレ「しかも今宵は照りもせず。

シテ「曇りもはてぬ春の夜の。

二人「朧月夜に。若く物もなき海士の苦。

地「八島に立てる高松の。苔の庭は痛はしや。さて慰

みは浦の名の。く。群れるる田鶴を御らんぜよ。
などか雲井に帰らざらん。旅人の故郷も。都と聞
けばなつかしや。われらも元はとて。やがて涙に
むせびけり。く。

ワキ詞

「いかに申し候。何とやらん似合はぬ所望にて候へ
ども。いにしへ此所は。源平の合戦の街と承りて
候。よもすがら語つて御聞かせ候へ。

シテ詞「やすき間の事かたつて聞かせ申し候ふべし。いで

其頃は元暦元年三月十八日の事なりしに。平家は海のおもて一町ばかりに舟を浮べ。源氏は此汀に打ち出で給ふ。大将軍の御出立には。赤地の錦の直垂に。紫裾濃の御着背長。鎧ふんぱり鞍笠につゝ立ちあがり。一院の御使。源氏の大将檢非違使五位の尉。源の義経と。名のり給ひし御骨がら。あつぱれ大将やと見えし。今のやうに思ひ出でられて候。

ツレ「其時平家の方よりも。言葉戦こと終り。兵船一艘漕ぎよせて。波打際に下り立つて。陸の敵を待ちかけしに。

シテ詞
「源氏の方にもつゞく兵五十騎ばかり。中にも三保の谷の四郎と名のつて。真先かけて見えし所に。

ツレ「平家の方にも悪七兵衛景清と名のり。三保の谷を目懸け戦ひしに。

シテ詞
「彼三保の谷は其時に。太刀打ち折つて力なく。す

こし汀に引き退きしに。

ツレ 「景清追つかけ三保の谷が。

シテ詞 「着たる兜の鎧をつかんで。

ツレ 「うしろへ引けば三保の谷も。

シテ 「身を遁れんと前へ引く。

ツレ 「互にえいやと。

シテ 「引く力に。

地 「鉢附の板より引きちぎつて。左右へくわつとぞ退

きにける。是を御覽じて判官。御馬を汀に打ちよ
せ給へば。佐藤繼信。能登殿の矢先にかゝつて。

馬より下にどうと落つれば。舟には菊王も討たれ
ければ。共にあはれと思しけるか。舟は沖へ陸は
陣に。相引に引く汐の。あとは鬨の声たえて。磯
の浪松風ばかりの。音さびしくぞなりにける。

「ふしぎなりとよ海士人の。あまり委しき物語。其
名を名のり給へや。

シテ
「我名を何と夕浪の。引くや夜汐も朝倉や。木の丸

殿にあらばこそ。名のりをしても行かまし。

地
「げにや言葉を聞くからに。其名ゆかしき老人の。

シテ
「昔を語る小忌衣。

地
「頃しも今は。

シテ
「春の夜の。

地
「潮の落つる暁ならば。修羅の時になるべし。其時は我名や名のらん。たとひ名のらずとも名のると

も。義経の浮世の。夢ばし覚まし給ふなよ。く。

(中入)

ワキ詞

「ふしきや今の老人の。其名をたづねし答にも。義経の世の夢心。さまで待てと聞えつる。

歌
「声も更け行く浦風の。く。松が根枕そばだてゝ。
思ひをのぶる苔筵。かさねて夢を待ちるたり。
く。

後ジテ

「落花枝にかへらず。破鏡ふたゝび照らさず。然れ

どもなほ妄執の瞋恚とて。鬼神魂魄の境界にかへり。我と此身を苦しめて。修羅の街によりくる波の。浅からざりし業因かな。

ワキ 「ふしぎやな早晩にもなるやらんと。思ふ寝覚の枕より。甲冑を帶し見え給ふは。もし判官にてましますか。

シテ詞
「我義経の幽靈なるが。瞋恚に引かるゝ妄執にて。猶西海の浪にたゞよひ。生死の海に沈淪せり。

ワキ 「おろかやな心からこそ生死の。海とも見ゆれ真如の月の。

シテ
「春の夜なれど曇りなき。心も澄める今宵の空。

ワキ 「昔を今に思ひいづる。

シテ
「舟と陸との合戦の道。

ワキ 「所からとて。

シテ
「忘れえぬ。

地 「武士の。八島に入るや楓弓の。く。もとの身な

がら又こゝに。弓箭の道は迷はぬに。迷ひけるぞ
や生死の。海山を離れやらで。帰る八島の恨めし
や。とにかくに執心の。残りの海の深き世に。夢
物語申すなり。く。

地クリ
「忘れぬものを閻浮の故郷に。去つて久しき年波の。
夜の夢路に通ひきて。修羅道の有様あらはすなり。
シテサシ
「思ひぞいづる昔の春。

地
「月も今宵にさえかへり。本の渚はこゝなれや。源

平たがひに矢先をそろへ。舟を組み駒をならべて。
打ち入れく足なみに。くつばみを浸して攻め戦
ふ。

シテ詞
「其時何とかしたりけん。判官弓を取り落し。浪
にゆられて流れしに。

シテ詞
「敵に弓を取られじと。駒を浪間におよがせて。敵
船ちかくなりし程に。

地

「敵は是を見しよりも。船をよせ熊手にかけて。既にあやふく見え給ひしに。

シテ詞

「されども熊手を切りはらひ。終に弓を取り返し。もとの渚に打ちあがれば。

地
「其時兼房申すやう。くちをしの御振舞やな。渡辺にて景時が申しゝも。是にてこそ候へ。たとひ千金を延べたる御弓なりとも。御命には換へ給ふべきかと。涙を流し申しければ。判官これを聞し

めし。いやとよ弓を惜しむにあらず。

クセ

「義経源平に。弓矢を取つて私なし。然れども。佳名は未だ半ならず。されば此弓を。敵に取られ義経は。小兵なりといはれんは。無念の次第なるべし。よしそれ故に討たれんは。力なし義経が。運の極めと思ふべし。さらば敵に渡さじとて。浪に引かるゝ弓取の。名は末代にあらずやと。語り給へば兼房。さて其外の人までも。皆感涙をな

シテ
「智者は惑はず。

シテ
がしけり。

地 「勇者は恐れずの。やたけごゝろの梓弓。敵には取り伝へじと。惜しむは名のため。惜しまぬは一命なれば。身を捨てゝこそ後記にも。佳名を留むべき。弓筆の跡なるべけれ。

シテ
「又修羅道の鬨の声。

地 「矢叫びの音震動せり。

シテ詞
「今日の修羅の敵は誰そ。なに能登の守教経とや。あらもの／＼しや手なみは知りぬ。思ひぞいづる壇の浦の。

地 「其船軍今は早。／＼。闇浮にかへる生死の。海山一同に震動して。舟よりは鬨の声。

シテ
「陸には波の楯。

地 「月に白むは。

シテ
「剣の光。

地
「潮にうつるは。

シテ
「兜の星の影。

地
「水や空。空ゆくもまた雲の波の。打ち合ひ刺し違
ふる。船軍の掛引。浮き沈むとせし程に。春の夜
の浪より明けて。敵と見えしは群れるる鷗。鬨の
声と聞えしは。浦風なりけり高松の。浦風なりけ
り高松の。朝嵐とぞなりにける。